

トラウマと解離の文脈

ピエール・ジャネの再発見

ジュゼッペ・クラパロ,
フランチェスカ・オルトゥ,
オノ・ヴァン・デア・ハート編
若山和樹, 筒井亮太, 白川美也子訳

金剛出版, A5判350頁, 5,500円, 2025年7月刊

(関西青少年サナトリウム) 清水健信

本書(原題は『ピエール・ジャネの再発見——トラウマ, 解離, そして精神分析のための新たな文脈』, 2019年)は, ピエール・ジャネを再評価すべく編まれた英語論集の邦訳である。

かつて精神分析家たちによってフロイトの「噛ませ犬」として扱われ, 長く人々の記憶の彼方に追いやられていたジャネを最初に「再発見」したのは, エランベルジェの大著『無意識の発見』(1970年)であった。本書でもたびたび言及されるこの書物は, フロイト神話を歴史的に相対化し, ジャネ, ユング, アドラーを復権させた画期的な仕事であり, 本邦では土居健郎と河合隼雄によって高く評価され, 木村敏と中井久夫による監訳の形で邦訳された。この大著の刊行以降, ジャネは著作の再版が進み, 解離・トラウマ論の先駆者として国際的に再評価の気運が高まっていった。本書はその流れの中で, 計22人の執筆者が今日の解離・トラウマ臨床に照らしてジャネを再考する試みである。

冒頭2章は本書全体の序論であり, 第1章で初期から中期の著作が概観されたのちに, 第2章では「下意識」概念が強調されつつ, 「解離の心理学」から後期の「行為の心理学」への展開が整理される。ジャネの考えの大まかな見取り図を得るうえで有用である。

続く第I部「精神分析へのジャネの影響」では, ジャネの理論がフロイト(第3章), ユング(第4章), フェレンツイ, フェアバーン, ブロンバーク(第5・6章)らのそれと対照される。評者には, ジャネと精神分析では患者層がそもそも異なるようにも思われた。

第II部「現代の精神外傷学へのジャネの影響」で

は, 第8・9章において「統合不全(désagrégation)」概念の重要性が論じられ, 第10章では「心理的力」「心理的緊張」「精神衰弱」などのジャネの諸概念を手がかりに, 統合失調症やパラノイアの理解が試みられる。

第III部「現代の心理療法へのジャネの影響」では, ジャネの実際の臨床と現代の解離・トラウマ臨床とが対比的に吟味される。ジャネの言う「経済性」(いわば「無駄のない簡素さ」)が現代の臨床ではあまり考慮されていないという指摘(249頁他)は示唆的である。

巻末には, ジャネがDSM-5を論評する架空の講演がエビログとして付されており, 読み物としても楽しめる構成となっている。

ところで, 2021年に遺稿集『Les Formes de la croyance』が刊行されたように, 今日においてジャネを読み直す際には, 狭義の解離・トラウマ論をはみ出す後期思想もまた無視できない。本書でもいくつかの章でその重要性が指摘されており, 「行為」や「信(croyance)」をめぐる後期の神秘主義的宗教思想を含めたジャネの新たな「再発見」が待たれるところである。

いま一つ, 日本の臨床家にとって興味深い点として, ジャネの臨床が森田療法に近いという指摘(274~275頁)を挙げておきたい。ジャネと森田の親近性は, 評者らが邦訳を準備中のエランベルジェの遺稿『Ethno-psychiatrie』でも指摘されており, そこには精神分析との対比という形を超えたジャネ読解の可能性が潜んでいるように思われる。

総じて本書は, ジャネに関心を持つ読者にとっても, 解離・トラウマ臨床に関心を持つ読者にとっても示唆と刺激に満ちた, 盛り沢山の好著である。

原書: Giuseppe Craparo, Francesca Ortu, Onno van der Hart (Eds): Rediscovering Pierre Janet: Trauma, dissociation, and a new context for psychoanalysis